

海うらら

海洋生物観察記

英国留学中、海洋生物学を学んでいました。
海の生き物達が教えてくれた雑学を紹介します。



【トグロコウイカ】

- へび ひつじ、それとも 楽器?! -

夏の夜、防波堤で海水をかき回すと、青白く蛍光色にきらめく。小さな植物プランクトンの夜光虫だ。私はこの光を見ると不思議と気分が落ち着くので、夜な夜な水をかき回しに行く。英国での私の住家は、海沿いのマリナーにあった。この辺りの海は干満の差が激しい為、干潮になると、ヨットは干潟の上にポツリと取り残されてしまう。そこで、英国の港の多くには、船が停泊する場所に可動式の扉と水路があり、水路と扉の内側を満潮の水位に保っている。そんな理由でヨットハーバーには真夜中でもドロボウ除けの警備の人や、ドックの扉を開け閉めするオジサンがおり、彼らが待機する建物の周りはいつでも温かい明かりが灯っている。

しばらく防波堤で夜光虫と遊び、すっかり癒され、いい気分で帰る途中、ふと、水面に目をやるとユラユラ漂う物がある。よくよく見れば、ドック内に漂っているのは、小さめのヨーロッパコウイカ *Sepia officinalis* だった(図1)。ドック内に迷い込んでしまったコウイカが、そのままボートとしている所に、オジサンがやって来て、扉を閉めてしまったのかもしれない。このままではエサが取れずに困るのではないだろうか? 不幸なコウイカには悪いが、私にとって、こんな幸運はめったにない。走って3階にある部屋に戻り、バケツと網を取りに行った。現場に戻ると、まだコウイカはぐっすり寝ている様子で、息切れしている私にも簡単に網で捕まえる事ができた。

部屋の水槽にコウイカをそっと移すと、フワフワと優雅に泳ぎだした。体の周囲にある透明感のあるヒレをゆっくり波打たせて泳いでいるので、宙に浮いているように見える。それまで私は魚屋で売られている白っぽく、ヌメッと伸びきったイカしか間近に見た事がなかった。初めて至近距離で見る“生きているイカ”の美しさにすっかり魅了された。その目はなんとも神秘的で、私の心の中まで見透かしている感じさえする。フワフワ漂う体の上には、幻想的な模様が、ゆっくりと、あるときは瞬時に流れてゆく。イカがこんなにも美しい生き物だったとは。図鑑やテキストに載っているイカの絵はとてもコワイ。怪物的で、スルメのように足を等間隔に開かれて描かれていたりする。そんな不自然な絵とは全く違う生き物がそこにいた。

図1：ヨーロッパコウイカ *Sepia officinalis*

分類【軟体動物門、頭足綱、コウイカ目、コウイカ科】
通称・モンゴウイカ 成体・体長14~40cm。体の色や模様を瞬時に変えて求愛や威嚇をする。

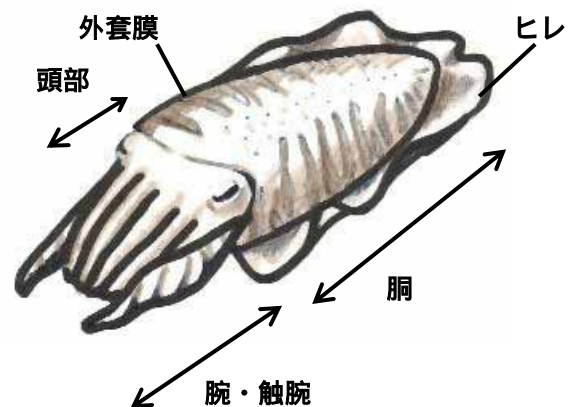
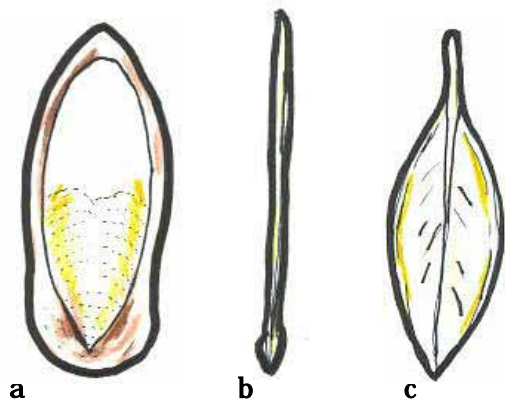


図2：イカの甲（骨）の種類と特徴

- a コウイカの甲 - 石灰質、厚く白い、「浮き」の役割
- b スルメイカの骨 - 半透明、非常に細い、薄い
- c アオリイカの骨 - 半透明、船型だが薄く、軽量



私はコウイカに新鮮なムール貝でもご馳走しようと、貝の身を水槽に入れてみた。コウイカ様は、急にお目覚めになり、ジェットな勢いでピューッと水を出しながら後ろに泳ぎ、水槽の壁に激突した。名残惜しかったが、再度ぶつかって脳震盪でも起こされては困る、と慌てて海までお送りした。たった25分の短い間だったが、あのコウイカの優美な姿は今でも忘れられない。

それ以来、イカは“気になる存在”となった。ある日、テレビを見ていたらBBCの自然番組でイカの特集があった。アメリカの研究者が実験室でコウイカにビデオを見せていた。水槽に入れられたコウイカはあの神秘的な目で画面をジッと見つめている。ビデオに何が映っているかと言うと、別のコウイカだ。画面のコウイカが白っぽくなると、茶色だったコウイカも瞬時に白くなり、シマシマ模様を出せば見ているコウイカも同じような模様を出す。腕を上挙げると、見ているコウイカも画面に向かって同じ腕をニューッと挙げる。海の中では、ボディランゲージはさらに複雑で、体の片側づつ色や模様を変えられる。気に入ったメスがいる側だけ求愛のサインを送り、他の雄がいる側半分だけ威嚇の色に変える事ができる。体の模様で様々なコミュニケーションをとれるらしい。

イカ・タコは貝類の仲間だ。軟体動物門と言うグループの中に頭足類（イカ・タコの仲間）も入る。頭足類（Cephalopoda）は、ギリシャ語で Cephalo が頭で、poda は足という意味。頭部から足がはえている事からついた名前のような。軟体動物（貝の仲間）は実に多様である。カサガイ、アサリ等は、いかにも「貝類」だと判り易いが、色とりどりのウミウシも殻は無いが貝の仲間だ。ウミウシは極小サイズの幼生の頃にはちゃんと貝殻を持っているが、成長する過程で殻はいつの間にか無くなってしまふ。“天使”などと呼ばれるクリオネも殻は無いが貝の仲間。イカは殻を体内にもっている（甲、骨と呼ばれる）。タコは、全く殻を退化させてしまったが、これもまた貝の仲間だ。

頭足類は外にあった殻を体内に収める / 失う事で複雑な動きを手に入れた。捕食者から守る堅い殻を無くしたイカ達は必要にせまられ、様々な術を身につける。進化の過程で、いずれも殻が軽く簡単な造りになってゆく（図3）。コウイカは体内の甲で浮力を得る事を選んだ（図2）。コウイカの甲は、石灰質で軽く、船の形をしていて、浮きの役割をする。プカプカ浮くのに都合が良い。速く泳げない分、体の色を変えたり、足をつかって海藻の真似をしてみたり、敵の目をごまかす術を身につけている。スルメイカなどの甲は透明の細い棒状でとても薄くて軽い。スルメイカは、甲（骨）を薄く、軽量化してスピードを追求したスポーツカーの様に速く泳ぐ事を選んだ。「速さ」は逃げる時も、獲物を追う時も役に立つ。アオリイカはずんぐりとしていて、一見コウイカの仲間のようなのだが、甲をみると、透き通った薄いスルメイカ風の甲がはいっている。石灰質ではないので「浮き」の役割は無いが、形は船型だ。両方の良い所取りで、プカプカ浮く事もできるし、スルメイカ程ではないが、ある程度のスピードも出る。タコは甲もホネも失う事を選んだ。利点は邪魔な甲がない

分、とっても狭い岩の隙間に潜り込み、敵から身を守る事ができる。そんな習性からか、タコは『つぼ』を見ると思わず中に入ってしまい、ヒトに捕まってしまう。

頭足類(イカ・タコの仲間)の中で唯一殻を外に持つのはオウムガイ(図3)だ。5億年前にオウムガイの祖先が出現、そこからバクトリテスという種が現れ、アンモナイトになったり、ベレムナイトというイカやタコの祖先になったりした。オウムガイは、絶滅してしまったアンモナイトより古い時代からいるのに、今も生き残っている。深い所に棲息していた為に環境の変化を受けにくかったのではないかとされている。イカの仲間には謎が多い。『殻』もった唯一の頭足類、のオウムガイは、その美しい殻をもっているが故に、お土産物用に沢山捕まえている。オウムガイもまた、謎だらけの生き物だ。一説によると20年近く生きるらしいが(一般的なイカの寿命はだいたい1、2年程度) なにしる深い所に棲んでいる為、自然界での詳しい生態は判っていない。それに加え、ある程度の年齢に達しないと繁殖しない。一回に産む卵の数もとても少ない。現在どれだけの数のオウムガイが海に存在するのか、基礎データが少ない為に保護の計画も難しい。『進化の生き証人を最近やっと現れた我々が絶滅に追いやってはいけない。』とイカ学の教授は言っていた。確かにオウムガイの現れた5億年前からすれば、人類が現れたのは、本当に、ほんの一瞬前だ。

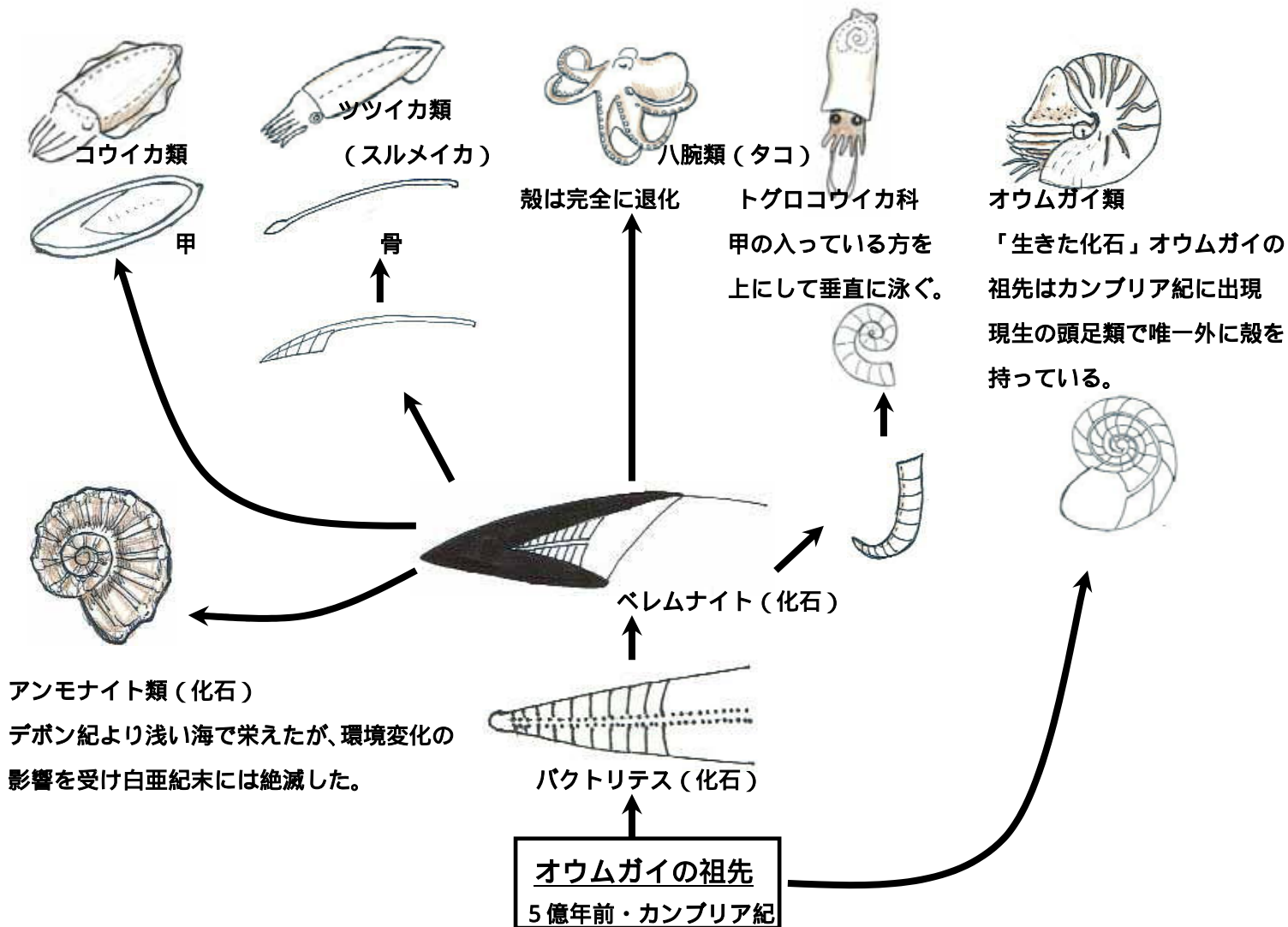
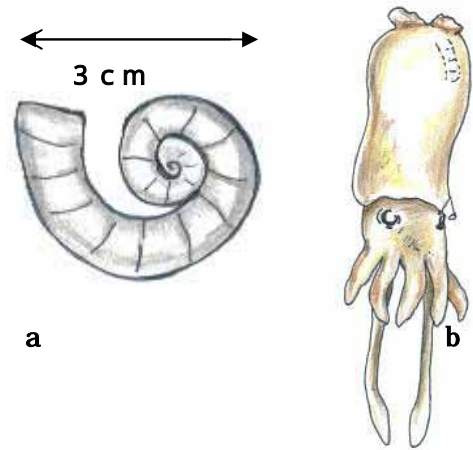


図3：頭足類(イカ・タコの仲間)の進化の様子。点線は体内の殻(甲や骨)の位置。

図4 : a トグロコウイカの甲

b トグロコウイカ *Spirula spirula* 巻いた甲を持ち、ガスと液体を調節して浮力をコントロールする。外側から一部分、甲が透けて見える。甲の入っている方を上にして、水深 200~700m で、体を垂直に立てて浮遊する。歯舌を欠く唯一のイカだが、食性など詳しい事は解明されていない。



大学で『イカの進化』についての講義中、映されたスライドを見て私は思わず「あっ！」と驚いた。見覚えのある物を思いがけなく目にしたからだ。それは、こんな形のものだった(図4a)。

私は幼少の頃、良く落ちている物を拾っていた。様々な色・形の小石はもとより、松ぼっくり、ドングリなどを小箱に集めて大事にしていた。海岸を歩いている時、例の渦巻き状の物を拾い、貝殻と共に箱にしまっていた。イカ学の教授曰く、体の中に巻貝のようにグルグル巻いた甲(2.5センチ位)を体内に持っているイカが居るといふ(図4b)。昔、貝殻だと疑わずに箱に入れた物が、イカの“体内”にあったもの、という事には本当にびっくりしてしまった。

渦巻き状の殻の持ち主は、トグロコウイカ *Spirula spirula* という奇妙な名前のイカだ。体長は4.5センチ程度で、全世界の熱帯水域で200~700m位の中層に浮遊している。日中は比較的深い200~600メートル付近を浮遊し、夜は水深100メートル近くまで上がってくるらしい。

トグロコウイカの“トグロ”はこの甲の形からついた名だ。イカが死ぬと、このトグロ状の甲がブカブカ漂流し、世界各地の海岸に、遠き島より流れ寄る...トグロコウイカひとつ...となる。

生きているトグロコウイカは、渦巻き状の甲の入っている方を上にして、体を垂直に立てて浮遊している面白いイカらしい。普通のコウイカのように食用にされないし、深い所にいることもあって、なかなか生きた姿を見る機会は少ない。よって、生きているトグロコウイカより海岸に打ちあがる渦巻き状の甲が目につく機会が多い。学名・俗名共に甲の特徴から付いた名前だ。学名のスパイルーラ、*Spirula*はラテン語で「ぐるぐる渦巻き・スパイラル」と、言った感じだ。俗名も興味深い。日本ではヘビがとぐるを巻いている様子にたとえて、トグロコウイカ、英語圏では、『牡ひつじの角』に見えるようで、俗名は Ram's horn という。他にも、『小さなポストホルン』(Little post horn) という俗名もある。私はこれがイメージ的にピッタリではないかと、この呼び方が気に入っている。ポストホルンというのは、楽器の名前なのだが、なぜ楽器に「ポスト」となどという郵便箱みたいな名前が付いているかということ、昔の欧州各国では、郵便は馬車で配っており、馬車が到着した合図に小さなホルンを吹いていたそう。その為、郵便配達の人がホルンを吹かなくなった今でもヨーロッパの郵便ポストや切手にホルンの絵柄が多い(イカとは関係ない話だが、ポストの色は、赤とは限らない。スペインでは黄色だし、英国のお隣、アイルランドではポストと言えは緑色なのが普通なのだ)。私が幼少の頃に住んでいたオランダで買った切手アルバムの表紙には、このポストホルンの絵がかいてある(図5)。トグロコウイカの甲は、まさにこの小さなホルンのようだ。

図5 : 楽器・ポストホルン

ヨーロッパで郵便を届ける馬車が合図に吹いていた事からポストホルンと名がつく。

